



JSQC ニュース

No.424

発行 一般社団法人 日本品質管理学会

東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内

電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507

ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス 第66回品質月間のご案内
- 2-私の提言 「日本の安全活動から学ぶ」
- 2-ルポルタージュ 第155回講演会ルポ
- 3-ルポルタージュ 第450回事業所見学会ルポ
- 3-ルポルタージュ 第147回クオリティ・トゥールポ
- 4-行事案内 / JSQC各賞表彰 / デミング賞受賞者一覧

第66回品質月間のご案内

品質月間委員会 事務局

「品質月間」は1960年から実施されており、今年で第66回を迎えます。

品質月間の起こりについてご存知でしょうか。1951年に大阪で品質管理大会が開催され、翌年から4社が品質管理強調月間を設立しました。「品質管理（QC）」の概念が広まり、一般消費者の関心も高まりました。

これを受けて、各種団体が丸となった品質管理の運動の中心として「品質月間委員会」が結成され、1960年（昭和35年）に毎年11月を「品質月間」とすることが決まりました。

品質月間の目的は、「品質管理を全国的に推進し、わが国産業の合理化と発展に寄与する」ことです。昨今のようにグローバル化やIT化が進み、経済環境や社会環境が目まぐるしく変化しても、品質管理の考え方には変わりはありません。

今年の品質月間のテーマは「今こそみんなで考えよう！ これからの品質の力」です。

少子化や自然災害の発生、物価高、国際紛争や社会経済的な変化、AIの急激な発展などの環境は加速度的に変化してきています。

目まぐるしく変化する不確実な環境で、不安や心配もあるかと存じます。

この品質月間を機会に、品質の力をみんなで考え、品質の力を再認識するとともに新しい発見を見つけることができれば幸いです。

●第66回品質月間●

今こそみんなで考えよう！ これからの品質の力

・ウェブサイト：<https://www.q-month.jp/>



Qマークガイドラインを作成しました！

今後申請はご不要になりました。ガイドラインを参考にご活用くださいませ。



Qマークの色は国連合の旗と同じブルーであったが、一般からのご意見もあり、日の丸色の赤になりました。

<品質月間の取り組み例>

- ・品質標語や品質川柳への応募による参画意識の醸成
- ・品質月間胸章（バッジ）の着用
- ・ポスターやのぼり、標語などの掲示による意識づけ
- ・月間テキストの購読や特別講演会の聴講による知見の獲得



月間テキスト一覧

478	カスタマーサクセスの推進 —お客様と共に—
479	海外から見た日本の品質経営の強さ
480	悩める管理間接部門の管理者に捧げるTQM読本
481	安全確保のための人と機械の協調
482	みんなの科学的な問題解決 —問題解決を生きる力に—
483	岡山村田製作所におけるQCサークル活動の推進 —現場に寄り添ったカイゼンを楽しむためのQCサークル活動の支援—
484	企業に求められる品質マインドの醸成 —階層別の学びと行動—

・各種大会への参加による改善成果の発表と達成感の獲得

10月14日 標準化と品質管理全国大会2025

11月14日 第55回全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動）

2026年2月25～26日 クオリティフォーラム2025

・各社独自の取り組み例

—品質関係で獲得した表彰状やメダルなどの展示コーナー設置

—自社から応募・入選した標語や川柳の掲示

—品質関連講座の開催

—品質月間開始にあたっての社長訓話

—社内報、社内ポータルサイトへの記事掲載

—自社スローガンの掲示

● 私 の 提 言 ●

「日本の安全活動から学ぶ」

住友電気工業(株) 杉谷 浩成

日本のものづくりにおける安全活動と品質活動は、それぞれ異なる目的、アプローチ、評価指標、組織内の役割を持っていますが、どちらも企業の持続可能な成長に欠かせない要素です。安全活動は主に人を対象としており、品質活動は製品やサービスに焦点を当てるという大きな違いがありますが、多くの工場が「安全第一」の理念を掲げているように、安全活動は歴史的に先行しています。日本の安全活動を分析し、そこから得た考え方や効果的な取り組みを品質活動に展開できれば、不良品の低減やロスの削減につながる可能性があります。

戦後、日本の労働環境は未整備で、労働災害が頻発していました。1947年に制定された労働基準法は、労働者の健康と安全を法的に保障し、労働災害の抑制に寄与しました。1952年には労働災害防止法が制定され、事業者に安全管理体制の構築が義務づけられました。1972年には労働安全衛生法が制定され、安全衛生管理者の選任や定期健康診断の実施が義務化され、労働環境の改善が進みました。1990年代以降、リスクアセスメントやヒヤリ・ハット活動が導入され、危険源の早期発見と事故の未然防止が進展しています。現在では、安全文化の浸透や企業の社会的責任への意識が高まり、多くの企業が自主的に安全管理を強化し、労働者の健康を守る取り組みを行っています。その結果、労働災害による死傷者数は大幅に減少しています。

国主導の労働災害防止活動は、日本の製造業の品質活動に気づきをもたらしています。厚生労働省は労働者の安全と健康を保護する法律を管理し、問題をトップダウンで監督しています。

また、労働安全衛生法では、業種や企業規模に応じた安全衛生委員会の設置が義務づけられており、休業4日以上

の労働災害が発生した場合には報告が求められています。労働災害に関するデータの分類、集計、及び過去の事例共有の仕組みも整備されています。

国は数年ごとに労働災害防止の中期計画を策定し、重点的に取り組むべき事項を設定し、活動の方向性を示しています。「挟まれ、巻きこまれ」など、事故の「型」別に管理を行い、災害原因の分析や必要な対策を適時講じています。さらに、安全衛生水準の向上や職場の危険要因の減少を目指して、労働安全衛生マネジメントシステムの導入も促進されています。近年では、再発防止にとどまらず、未然防止に重点を置いた活動へと移行しています。

これらの要素を自社の品質活動に照らし合わせ、異なる点やギャップの分析によって有効な取り組みが見えてくるかもしれません。日本の安全活動と品質活動を融合させる新たな視点が、持続可能な企業経営に寄与すると考えています。

第155回
講演会
ルポ品質保証と
人材育成への取り組み

2025年7月1日、関西支部主催第155回講演会『品質保証と人材育成への取り組み』が開催されました。

関西支部・清水幹事長より開会のご挨拶の後、講演①では齋谷佳和氏（元(株)村田製作所）により「調達品質確保のための人材づくりと仕掛けづくり」についてご講演いただきました。ご講演では、調達品品質確保に必要な人材の能力として、専門知識や周辺知識だけでなく、仕事の基礎力である「考える力、対人力、頑張る力」が大切であり、仕事には常に「2軸志向を持つ（仕事で結果を出すことが第一だが、同時にその活動を通じて、自分のどんな能力を高めるかを意識して仕事をする。経験からできるだけたくさんのことを学んでやろうという姿勢が勝負を分ける）」というお話は、人材育成を考える上で、大変興味深いご講演でした。また、能力を鍛える仕事の中での経験学習

について、Y（やったこと）、K（気づいたこと）、T（次にやること）のサイクルとして、大変分かりやすくご紹介いただきました。

続いて、講演②では茨木康充氏（ヤマハ発動機(株)執行役員生産技術本部本部長）並びに、内田晴久氏（調達本部調達推進部企画推進グループリーダー）より「“廉価・汎用・横展開”内製DX技術を使ったお取引様との協創活動」と題してご講演いただきました。現場が自ら暗黙知を形式知化できる「現場サイエンティスト」を育成する活動について、具体的且つ現場の臨場感がありありと伝わるご講演でした。「デジタル人材が足りないことではなく、現場が自らの仮説を定量化できない点」に突き刺さり、ヒト創りと環境創りで実践されたお取組は、DX活用を実践・検討している聴講者にとって、非常に有益な講演となりました。

最後に閉会挨拶は、猪原正守氏（大阪電気通信大学名誉教授）にお言葉をいただき閉幕いたしました。

参加者数は対面・リモート合わせて約66名となり、質疑応答も活発に行われ、大変有意義な講演会でした。

鍋田 真由香（ダイキン工業(株)）

第450回 事業所見学会 ルポ

セイコーエプソン

2025年6月12日、日本品質管理学会 東日本支部主催の「セイコーエプソン様事業所見学会」に参加しました。

場所は、諏訪湖のほとりにある本社事業所で、まず訪れたのは「エプソンミュージアム諏訪」。

ここでは、セイコーエプソンの原点である機械式腕時計の製造から、現在のインクジェットプリンターやプロジェクターへと進化してきた歴史を、展示物と共にわかりやすく解説していただきました。

中でも特に印象的だったのは、国際スポーツイベントのタイム計測を記録するというニーズが印刷技術の開発につながり現在のプリンターへと発展したこと。また腕時計のデジタル表示技術が画像表示の液晶技術へと発展し、プロジェクターの開発に結びついたとのことのお話です。

こうした技術進化の背景に、同社の理念である「省・小・精（より効率的に・より小さく・より精緻に）」の精神が貫かれているところにも深く感銘を受けました。

その他、環境への配慮として「諏訪湖を汚さない」という信念をむしろ技術革新のきっかけと捉えたのであろう、印刷済みの紙を粉碎して直接紙を再生する製品も紹介していただきました。

現在の主力製品は、売上の約7割がプリンター関連、残りがプロジェクターと腕時計などの精密機器で半々とのことですが、「時計製造の技術がプリンターやプロジェクターといった大きな柱に育った」との説明がとても印象的でした。

見学の後、品質保証の取り組みについても紹介がありました。品質保証というと、どうしても「問題を見つける」などネガティブな印象を持たれがちですが、同社では「エプソンファンを増やす」という前向きな視点で活動されている点と、過去の失敗は社員が「なるほど」と納得できるまで説明し、教訓として活かそうと工夫している点は、私自身の業務にも今後活かしていきたいと感じました。

最後に、このような貴重な学びの機会を提供して下さったセイコーエプソン(株)および日本品質管理学会（東日本支部）の皆様に、心より感謝申し上げます。

杓本 貴司（旭化成(株)）

第147回 クオリティーク ルポ

品質不正は なぜ起こるのか

2025年7月4日、第147回クオリティーク（東日本）が開催され、「品質不正はなぜ起こるのかー安全と機能だけでなく、安心と信頼性を提供するために」をテーマに、約60名の参加者による活発な議論が行われた。

講師は、SOMPOリスクマネジメント(株)より古字朗人氏及び安藤悟空氏を講師に迎え、品質不正の要因とその防止策について、専門的な視点からの講演が開催された。

論点は5つのテーマの品質不正の検証が行われたが、いずれにおいても参加者からの質問が相次ぎ、時間内に全ての質問に対応出来ないほど活発な意見交換となった。

印象に残った事例としては、品質不正の抑止力としては、システムの自動化だけでは不十分であり、部門・関係者間の密なコミュニケーションが不可欠で、

技術と人の連携が不可欠である事である。意図的な不正は表面化が困難であり、品質不正の異変を察知する能力が求められ、生産現場との信頼関係が品質不正の早期発見の鍵となることを再認識した。人員配置としても、同一業務に長期在籍することは潜在的なリスクを生む可能性もあり、定期的な人事異動の検討も必要であるが、固有技術継承のバランスを取ることが組織体制上の課題である。その固有技術の向上には継続的な教育が不可欠で、組織全体で倫理観を共有し、個人の行動改革に繋げる職場環境の整備が求められる奥深さも共感した。経営層の意識改革と内部通報制度の強化が重要で、現場との対話を重視した信頼関係を築くことが品質不正の抑制に直結していかなければならない。

本トークでは、品質不正の構造的課題に対して参加者一同から多角的な視点から議論が行われ、各知見は経験談に富むものであり、今後の品質モラルに向き合う為の多くの学びを得る貴重な機会となった。

平社 健作（日本精工(株)）

行事案内

●第24回「安全・安心のための管理技術と社会環境」ワークショップ

テーマ：－Safety-II：理論を実践につなげるには－

日時：2025年12月22日(月)13:00～17:30

会場：Cisco Webex Event（オンライン開催）

プログラム：

1. 開会挨拶・趣旨説明
伊藤 誠 氏（筑波大学、日本品質管理学会）
2. 問題提起：Safety-II：理論を実践につなげるには
首藤 由紀 氏（社会安全研究所）
3. セーフティIIとは？ 失敗を減らすから成功を増やすへ
芳賀 繁 氏（立教大学）
4. 自主的安全性向上に向けたSafety-IIベースの実践的取り組み
高橋 信 氏（東北大学）
5. 医療安全：適応キャパシティのしなやかな拡張と境界を越えた協働
中島 和江 氏（大阪大学医学部附属病院）
6. パネルディスカッション
Safety-II：理論を実践につなげるには
コーディネータ：首藤 由紀 氏
パネラー：木村 浩 氏（木村学習コンサルティング）、飯塚 悦功 氏（東京大学）、上記講演者

詳細・申込：https://jsqc.org/25ss_ws/

事務局

JSQCホームページ：www.jsqc.org/

各賞表彰

第55回通常総会において、最優秀論文賞1件、研究奨励賞1件、品質技術賞2件、品質管理推進功労賞2氏、の授賞および表彰が行われました。

【第54年度 最優秀論文賞】

『改良型T法の性質と新たな規準化の研究』

松尾 朋響 氏（早稲田大学 大学院 創造理工学研究科 経営システム工学専攻）

岩本 大輝 氏（早稲田大学 創造理工学部 社会文化領域）

永田 靖 氏（早稲田大学 創造理工学部 経営システム工学科）

「品質」 Vol. 55, No.2, pp.49-60（2025）

【第54年度 研究奨励賞】

張 怡 氏（中央大学 理工学研究科 経営システム工学専攻

（現在、筆食瓢飲（蘇州）飲食管理有限責任会社）

『SERVPERFを拡張したサービス品質の測定尺度』

著者：張 怡／中條 武志 「品質」 Vol. 54, No.4, pp.56-66（2024）

【第54年度 品質技術賞】

杉谷 浩成 氏（住友電気工業株式会社）

『日本のものづくりと品質管理の発展に向けた実践的アプローチ』

著者：杉谷 浩成 「品質」 Vol. 55, No.2, pp.36-43（2025）

永井 庸次 氏（株式会社日立製作所）

光藤 義郎 氏（一般財団法人日本科学技術連盟）

『MIBM（まあ、いいか防止メソッド）のその後』

著者：永井 庸次／光藤 義郎／中條 武志 「品質」 Vol. 55, No.3, pp.30-38（2025）

【2025年度 品質管理推進功労賞】

鈴木 啓介 氏 川崎重工業株式会社

新倉 健一 氏 インフロニア・ホールディングス株式会社

デミング賞委員会（委員長 筒井 義信）において、2025年度のデミング賞本賞、デミング賞特別功労・実践賞、デミング賞、日経品質管理文献賞の受賞者が決定し、授賞式は11月12日経団連会館にて執り行われました。

1. デミング賞本賞

大橋 徹二 氏 株式会社小松製作所 特別顧問

2. デミング賞特別功労・実践賞

安藤 之裕 氏

一般財団法人日本科学技術連盟 国際事業参与

David Hutchins 氏

Chief Executive, David Hutchins Innovation Limited

3. デミング賞

Global Indian International School, Tokyo

Tata Autocomp Hendrickson Suspensions Private

Limited（インド）

4. 日経品質管理文献賞

「実践 方針管理 革新戦略推進のフレームワーク」

日本科学技術連盟 方針管理研究 著

「自動車産業を支え続けて100年 黒子のモノづくり」

長谷川 士郎 著

「JSQC選書38 慢性期医療の品質マネジメント

人生に伴走する医療の確立に向けて」

一般社団法人日本品質管理学会 監修

進藤 晃 著